2023年9月17日（日）主日朝礼拝説教

『罪は犯すけれども…』　井上隆晶牧師
Ⅰコリント1章1〜11節、マタイ1章1〜11節

❶【イスラエルの系図】

マタイはユダヤ人に向けてこの福音書を書きました。ユダヤ人は系図をとても重んじる民族であり、旧約聖書の中にもたくさんの系図が出てきます。ユダヤには、メシア（救世主）はダビデの子孫から生まれるという預言がありました。そこでマタイはイエス様はダビデの子孫であることを系図によって証明しようとしたのです。この系図はアブラハムから始まっています。それは彼がイスラエル民族のルーツだからです。イスラエルというのは人種ではなく、信仰の民の名前です。この系図には 41 名の名前が出てきますが、ほとんどが無名の人たちです。2〜6節では 4 人の女性の名前が出てきます。タマルは義理の父ユダと近親相姦をして子供を産んだ女性です。ラハブはエリコの町の遊女で外国人です。ルツはモアブ人です。ウリヤの妻バテシェバはダビデが姦淫を犯した相手です。6〜11 節では王たちの名前が出てきます。ダビデ王が出てきますが「**ダビデはウリヤの妻によってソロモンをもうけ**」（6節）と書かれています。ダビデはウリヤという部下の妻を奪って姦淫の罪を犯し、それがばれるのを恐れてウリヤを殺害しました。11〜16節ではイスラエル民族がバビロンに滅ぼされ、奴隷となった人たちの名前が書かれています。最後にマタイは 14 代という数字でこの系図をまとめています。（正確には違うが）14 は 7 の倍数です。7 は完全数でありその 6 倍の 42 代になっています。つまり、人間の歴史が完全に満ちて、救い主イエス様の時代がやってきたということを教えようとしています。

❷【罪は犯すけれども】

10節にマナセという王様が出てきます。彼は神殿の中に異教の祭壇を作り、神殿の庭で太陽や月を礼拝し、魔術、霊媒も行い、自分の子供を火の中に通らせ、偶像崇拝をしました。彼はアッシリアに負けて捕らえられ、青銅の足枷につながれてバビロンに引いて行かれました。しかし彼はそこで回心します。「**彼は苦悩の中で自分の神、主に願い、先祖の神の前に深くへりくだり、祈り求めた。神はその祈りを聞き入れ、…彼を再びエルサレムの自分の王国に戻された。こうしてマナセは主が神であることを知った。**」（歴代誌下 33：12〜13）とあります。その時の回心の祈りが、旧約聖書続編に「マナセの祈り」として載っており、受難節の晩の祈りで朗読するように定められています。ユダも、ラハブも、ダビデも、マナセも罪を犯しましたが皆回心しました。この系図は回心した人たちの名が載っているのです。人間は罪を犯しますが、回心することが出来るのです。神に帰れば赦されるということなのです。悔い改めは偉大な恵みです。

❸【神と人は家族になった】

16 節「**ヤコブはマリアの夫ヨセフをもうけた。このマリアからメシアと呼ばれるイエスがお生まれになったのである。**」とあります。それまでは「誰々は誰々をもうけた」と書かれているのに、ここでは「ヨセフはイエスをもうけた」とは書かれていません。つまりイエス様はヨセフの子ではなく、マリアの子であるということになります。ヨセフの系図はここでプチンと切れているのです。マタイはこの系図を系図として書いたのではありません。これを《**福音**》として書いています。この系図ははっきり言ってあまり良い系図ではありません。よく TV で自分は「伊達政宗の子孫だ」とか「織田信長の子孫だ」という芸能人で出てきます。自分の家系図に偉人や有名人がいると何か自分まで偉くなったような気分になりますが、この系図は罪人だらけです。**キリストは、人間の罪の歴史を、ご自分の歴史として受け継がれ、ご自分の家系、家族とされたということです。キリストによって外国人も、女性も、罪人も無名なあなたも、数に入れられないような人も、どんな過ちを犯してしまった人も、皆神様の家族として入れられたのですよ、ということを伝えようとしているのです。**

ルカの福音書 3 章にもイエス様の系図が出てきますがマタイとだいぶ違います。38 節に「**エノシュ、セト、アダム。そして神に至る。**」と書かれています。人間は単なる動物ではなく、神から出た神の子孫なのだというのです。人は獣にもなりますが天使にもなれます。しかし原型は天使です。その証拠はどんな人も神の像（イメージ）で造られ、神性の断片を持っているからです。教父たちは「**悪は習性だが、善は本性である**」と言っています。もともとの性質は善なのですから悪い習慣をやめることにより、キリストと聖霊の愛と力によって回復することができるのです。そこで神の子イエス・キリストが神の元からやってきて切れてしまった人間の系図の端っこをしっかりと握り、再び神の系図と結んだのです。この方は、完全な神だからこそ神とも手を結ぶことが出来、同時に完全な人間だからこそ人間とも手を結ぶことができるからです。まるで父と子と聖霊の神が、両手で人類を抱きかかえているようです。だから、キリストから手を離してはなりません。教会という羊の囲いから出てはなりません。

●フィリップ・ヤンシーはこのようなことを書いています。「創世記を読んでみよう。そこには家族の歴史が書かれている。それはアダムとエバの家族で始まる。…読み続けるとアブラハムの家族に出会う。何十年もかかって旅をした家族だ。それからイサクの家族の物語が、そしてヤコブの家族の物語が続く。…家族の歴史を語る聖書とは対照的に、教科書が語っているのは文明の起源と滅亡の歴史である。今日の新聞をにぎわせているのは、国家、都市、大学、政府機関、企業についての記事だ。焦点は家族から組織へと移っている。だが、新約聖書は、教会を組織よりも家族のようなものとして、頑固なまでに提示している。」

イエス・キリストは私たちを探し出し、ご自分の家族に迎え入れて下さいました。何という恵みかと思います。私たちは罪人ですが、キリストに愛された罪人です。毎日罪を犯してしまいますが、そんな自分をあきらめてはなりません。キリストは罪を犯すあなたを知っていて、受け入れてくれたからです。たとえ罪を犯してもそれはあなたの全てではなく、ごく一部であり、一時的なものなのです。自分の中にある神が創られた善いものを信じましょう。そんな自分をキリストは愛しておられることを思い出しましょう。

●先日 YWCA の集会である人が「イエス様を罵った十字架の強盗は地獄に行っただろうか？たぶん天国に行ったんと違うだろうか？」と言われたので、後で私はその方に言いました。「それは分かりません。人間には自由意志が与えられているので、神を拒否することもできるからです。でも大事なことは、どんなに人間が神を拒否しても、神の愛は変わることがないということです。その人がたとえ地獄に行ったとしても、そこでも神の愛は変わることなくその人に注がれているのです。」

皆さんが、ますます神とキリストの大きく深い愛を知り、信じる者となれますように祈りたいと思います。